

宗片邦義『英語能ハムレット』の精神性 On *Noh Hamlet* in English by MUNAKATA Kuniyoshi

遠藤 花子

ENDO Hanako

Abstract: The Professor Munakata's work of *Noh Hamlet* in English undoubtedly changed the common notion of *Hamlet* being the revenge tragedy. It is an absolutely beautiful piece of work indicating forgiveness and the pleasure of leaving "this temporary world." One of the remarkable aspects in *Noh Hamlet* is that the line of Gertrude, "All that lives must die," is used at the final scene when she dies, which sounds that it is her final message to Hamlet, though the original line is as if it is used as the excuse for her second marriage. Another important scene is Hamlet sitting (zazen) in front of the grave of Ophelia, telling "To be or not to: is not the question," which shows Hamlet's crucial decision of life or death and his love for Ophelia.

Keywords: Kuniyoshi Munakata, Shakespeare, *Noh Hamlet*, Gertrude, Ophelia
宗片邦義、シェイクスピア、『英語能ハムレット』、ガートルード、オフィーリア

宗片邦義先生が『英語能ハムレット』を実際に舞台上で舞っていらっしゃるのには拝見していないのだが、国際融合文化学会や日本英文学会のご講演を通して何度か触れている。加えて、YouTubeにも短縮バージョンがアップされているので、パソコンの画面を通して鑑賞することは可能である。今回は、宗片先生のシェイクスピア能の原点とも言える、日本語ではなく英語で行われた『英語能ハムレット』について考えてみたい。

能楽の世界では、『ブライズ先生、ありがとう』で述べられているように、「亡霊の出現する能の世界は、本当にこの世とあの世の橋渡しの芸術のよう」(p. 85)であり、現世に戻る死者は、生きている者にとって大切な存在である人、あるいは生きている人を励ます存在であることが多い。シェイクスピアの作品のいくつかにも亡霊は登場するが、その存在は様々である。『マクベス』や『リチャード3世』に登場する亡霊は、殺した本人のとこ

ろに現れるなど、殺されたことに対する恨みや憎しみに満ちている。むしろ、マクベスやリチャード3世に、「苦しめ、苦しめ」と威圧しているかのようであり、衰亡を願って出現する。こういった亡霊には、もはや救いの精神を読み取ることは不可能であり、能楽における死者の役割とは本質的に異なっている。

『ハムレット』の中では、既に旅立った父の亡霊は、迷えるハムレットを更に迷いの世界に引き込んでしまう。ハムレット（息子）に向かって“Doomed for a certain term to walk the night, / And for the day confined to fast in fires, / Till the foul crimes done in my days of nature / Are burnt and purged away.” (1. 5. 10-13) と、「あの世」ではなく、日夜さまよっていることを告げるが、息子に復讐を促すような亡霊（悪魔による幻影）とも表現されて当然の亡霊は、「あの世」に行けなくとも当然だろう。ここには、はかなさしかなく、悪がそぎ落とされた「あの世」の世界の美しさは皆無である。このような理由から、5場構成の『英語能ハムレット』（1982-3）の公演では父の亡霊も出ていたが、その後2場構成に短縮してからは、父の亡霊は出現しなくなったというのも大いに納得ができる。

また、言語的な要素から考察すると、日本語は母音が多く、それに比べて英語は母音が少ない。加えて、iambic, trochee, anapest など、詩の持つ特有のリズムや韻を表現するのが英語であり、日本語にはない。ブライズ先生も大事にしていたという英詩のリズムは「自然と人間が調和した世界」へと人々を誘うものである。そのような美しい世界を表す英詩であるが、“To be or not to be, that is the question.” が「高砂や」で謡えると宗片先生が発見した通り、よく見ると、英語にしては珍しく母音が多い詩であることが分かる。母音をうまく利用すると、美しい響きをかもし出す天上の音楽とも言える能の調子にのせられるということであろうか。また、英語能の成功の秘訣の一つは、フランス語のように鼻に抜ける音がないこと、スペイン語のように巻き舌がないことなどもあったかもしれない。

この“To be or not to be, [---]”のフレーズは、表現を変え、『英語能ハムレット』の作中繰り返し謡われている。実際に『ハムレット』の“To be or not to be, that is the question”の解釈は多様で、舞台においても映画においてもこのせりふを述べるに当たり、様々な工夫がなされている。映画を例にとると、ローレンス・オリヴィエ主演の『ハムレット』では、断崖絶壁で死の恐怖と隣り合わせの状態ですべられる。BBC Shakespeare の『ハムレット』では、深刻な様子はなく、むしろ現実に向き合うかのように、場所も城の中で、カメラに話しかけるかのように述べられる。イーサン・ホーク主演のモダンな『ハムレット』では、レンタル・ビデオ・ショップの中で述べられ、虚構と現実の世界を迷い歩いて

いるかのようなのである。いずれにしても、question を解こうとしていることが分かる。

『英語能ハムレット』において、オフィーリアのお墓の前に、ハムレットが座禅を組む場面では、はっきりと“I loved Ophelia.”と断言し、そして、オフィーリアのお墓の前(宗片先生の舞の中では座禅を組んだ状態)で“To be or not to be, that is no longer the question”と繰り返し述べる。さらに、“Get thee to a nunnery. Go. Farewell.”と続く。『ハムレット』の中では埋もれて表面に出てくることのない、オフィーリアに対して抱いていた感情、そしてオフィーリアの死を痛む心が『英語能ハムレット』では明瞭に示されている。実際のシェイクスピアの『ハムレット』では、オフィーリアに面と向かって“Go to a nunnery”と辛辣に述べるが、このせりふがお墓の前で述べられると、ハムレットの冷たさは微塵もなくなる。そして、座禅を組んだあとのハムレットは、“The readiness is all.”“To be or not to be is not the question.”と覚悟を決めることの重要性に気づく。『ハムレット』では、亡霊を見た後の3幕1場で早くも“To be or not to be, that is the question.”が述べられ、終始 question が解けぬまま最期を迎えてしまうが、『英語能ハムレット』では、“not the question”更には“The readiness is all.”と決意表明がある。そして、最後の決闘のシーンへと向かう。

最期の決闘シーンの中では、ガートルードの“All that lives must die.”というせりふが謡われる。このせりふは、『ハムレット』の最初の場面でガートルードがクローディアスとの再婚を決めた直後に発言されるため、再婚した言い訳のように捉えることもできる。ハムレットに向かって、死んだ人のことをいつまでも考えているのはよくないと、ハムレットを諭すように述べているせりふに見えるが、実際に死ぬ場面で使われると、重みが増し、このせりふの重要性に改めて気付かされる。ガートルードの再婚については、彼女がQueenの身分を保ちたかったため、ハムレットのことを考えての決意などの他、悲劇を更に悲劇にするために、最初の場面で観客に精神的な苦痛を与えるために、また、これから先に続く悲劇をリードするために、作劇構造の面から「亡霊」と「再婚」のエピソードが最初の場面にきているとも考えられる。しかし、最後にガートルードが死ぬ場面で再び“All that lives must die.”というせりふに戻ると、死に際の間人が大事な人に残す最期の訓えのようになる。このガートルードのせりふは、観客をこの世の悪に関連することが削ぎ落とされた精神世界へと誘う役目を果たしている。

ガートルードは再婚、ハムレットとの関係性などから理想的な母親像とは言えないかもしれないが、せりふだけを追うと非常に美しい。例えば、オフィーリアの死を伝える場面では、オフィーリアが亡くなった時の様子を、次のように述べる。

小川のふちに柳の木が、白い葉裏を流にうつして、斜めにひっそりと立っている。オフィーリアはその細枝に、きんぼうげ、いらくさ、ひな菊などを巻きつけ、それに、口さがない羊飼いたちがいやらしい名で呼んでいる紫蘭を、無垢な娘たちのあいだでは死人の指と呼びならわしているあの紫蘭もそえて。そうして、オフィーリアはきれいな花環をつくり、その花の冠を、しだれた枝にかけようとして、よじのぼった折も折、意地悪く枝はぼきりと折れ、花環もろとも流のうえに。すそがひろがり、まるで人魚のように川面をただよいながら、祈りの歌を口ずさんでいたという、死の迫るのも知らぬげに、水に生い水になづんだ生物さながら。ああ、それもつかの間、ふくらんだすそはたちまち水を吸い、美しい歌声をもぎとるように、あの憐れな牲えを、川底の泥のなかにひきづりこんでしまって。それきり、あとは何も。(4幕7場、福田恆存訳、新潮文庫、1988)

謡曲でもそのまま使えるかのような内容である。このせりふの美しさに感動した画家たちは、競い合うかのように絵画で表現している。小川に吸い込まれていくオフィーリアの姿はそれ故、人の脳裏に焼きついている場面の一つと言えよう。ガートルードのせりふは、実に芸術性に富んでいることが分かる。

決闘シーンは、言わばハムレットが死に向かうシーンである。周りの人々も命を落とすが、『英語能ハムレット』では、血生臭さはなく、“Exchange forgiveness”、すなわち「許し」の世界で、この世の苦しみや無情さと別れ、美しいあの世へと旅立っていく。そして、敢えて日本語で「オモエバカリノヤド」と謡われる。この世は仮の世界、そしてあの世が本当の世界ということになるが、現実が苦しいからこそ、また、人間が人間を殺す非人道的な世界だからこそ、「仮」でいいのだろう。

そして、最後の場面で、“The rest is silence.” というハムレットのせりふの後にホレイシオのせりふ、“Good night sweet prince, / And flights of angels sing thee to thy rest.” (5.2.338-39) が続く。このハムレットが唯一信頼を寄せていた人物であるホレイシオのせりふには、ハムレットに対するお悔やみと同時に、能にみられる静寂の世界が表現されていると言える。このように謡われることにより、ホレイシオの悲しみに答えるかのように、次はハムレットがこの世に降りてきて、人間のはかなさと弱さを語ってくれることを期待しているかのようなようである。あるいは、最初からハムレットはあの世の人で、この世に降りてきて物語っていただけのようにも思えてしまう。

能楽の精神を融合させると悲劇のはずの『ハムレット』が美しい作品になることが証明された。